グリフィス福井日記・書簡に見る廃藩について

山下　英一

1

われわれは廃藩置県ということばを口にしたり耳にしたりする。しかしこれはいわゆる廃仏毀釈のような四文字熟語ではなく廃藩と置県とは別々に切り離して考えてよい。訳もなしに置県が廃藩の後ろにくっついてそのまま滑るようにその四文字が歴史のなかを罷り通って行く。立ち止まって廃藩について考えてみてはどうだろう。

グリフィスの日本行きは怖かった。目指す目的地の福井は亡き日下部のふる里であった。もし彼と自分が安息の地を取り替えるようなことがあっても、ぼくのことは忘れないでくれと大学新聞に悪い冗談を書く。実際、最初にしばらく逗留した東京で、賊に切られて負傷した南校の英国人教師ダラスとリングを見舞っていた。四月に福井で会ったグリフィスとよく似た年齢の英国人英語教師リトルウッドが、金沢藩に赴任の途中に大聖寺で死ぬ。天然痘で死ぬ。金沢藩によって手厚く葬られたが、グリフィスは墓に詣でて野の草花を手向けている。

明治4年3月4日からグリフィスの福井生活が始まる。藩主から生徒までが早くも訪ねて集まってくる。大政奉還、版籍奉還に準じて知藩事を命ぜられた松平茂昭との間に食事をして話す機会が5回あった。そのうち実際に会ったのは3回で、3回のうちの1回がグリフィスの招待であった。そのときの家来は三岡八郎、小笠原盛徳、堤正誼ら参事であった。その会合の4月1日の日記に「改革が起きることは確かである」(decidedly revolutionary)と早くも廃藩の気配を感じ取っている。

福井藩が外国人の教師を雇うことをいつごろ決めたのだろう。英語教師イギリス人のルセーは前年の6月から教えていた。あと医者[1]と砲術士官のうち士官の名がブリンクリーと知られていた。それなのに4人の住宅が今から着工という。グリフィスは着任前に藩の役人と話し合うこともなくまったく好きなように授業を受け持っていたらしい。姉マギー[2]に出した3月12日の手紙によると、

> 化学と物理の教科書を作る案を立てて書いているので忙しい。僕らの本はどれもぼくらの生活と文明の様式に合わせてある。ぼくのねらいは英国と米国の好い教科書をよく調べて、自分で注をつけ、配列し、挿絵を入れて日本人向きの本を作ること。同時に通訳に手伝ってもらう。

グリフィスにNew Japan Seriesといって日本人向きの英語教科書[3]が4部あって、これらは輸入本が主流を占める東京時代に作っていた。そのことが本邦最初の試みとおもっていたが、すでに化学の教科書で始まっていたのに驚かざるを得ない。

グリフィスのことを聞かれるときまって福井の滞在期間を問われる。ざっと3月から翌年1月まで1年にみたないと答えると、みな

一様にそのあまりの短さに怪訝な表情に変わる。しかしこの理由は7月14日に発布して18日に届いた廃藩置県の知らせにあった。町の人の心のうちに思わぬ変化が生じてきた。事情の思わぬ変化にグリフィスはどう動かざるをえなくなったか。「夢」と「現実」のはざまに置かれた外国人の内部の問題を考えたい。彼が物事の判断に使う方法に「外から来るのでなく内から生じる、つまり衝撃を受けるのでなく衝動を起こす」(from within, not from without; from impulse, not from impact)といった心の持ち方がある。

7月18日のグリフィス日記によると、「明治政府から役人を省いて給与を減らせとの布告（7月14日）(Proclamation from Imperial Gov. dispencing with officers and reducing incomes.)が届き、日本中の家族数千に動揺。斎藤、大谷、佐々木、田川が学校に来た。私の護衛役人井上と中村が解雇になった。」とある。これがグリフィスの最初にとらえた廃藩の意味であった。ふと或るエピソードが浮かんだ。着任そうそう石切り場を訪ねたとき、石運びの作業をみた。背中に石をのせて山を降りる男。男に指図する役人。役人が自ら働いて生計を得るのは恥であると思うかぎり日本は偉大な国にはなれない。この観察と意見は彼もまた北軍を志願して人種的差別からの自由のために戦った記憶の延長にあった。一般に役人が必要以上に多くて無駄な支出を気に病み、10月末の2つの学校の統合が約20人の教師を不必要にさせたことには密かに喝采を送った。始めにいっておくとグリフィスのその頃の手紙には廃藩のことは全く触れられていない。何故だろう。生活、とりわけ金銭上のことで親に心配かけたくない。

グリフィスは経済観念の発達した人で金銭上のやりくりがじょうずであった。来日にあたり渡航費に藩から４００ドルの支給があったが、準備費のために多額の借金を背負っていた。特に教育局への借金返済は大きかった。その上、家族への月々の送金があった。確かに藩から受ける俸給は高い。しかし最初の年にしてはこれが精一杯のやりくりであった。

廃藩の動揺はあった。"The Mikado's Empire" 2部第15章7月18日の欄には三岡八郎を殺すと脅すサムライがいて、彼が１８６８年の功績で収入を得るなどあって国家の改革の中心人物と思われたからであった。彼の天皇支持の所為だというものもいた。藩によっては藩主を行かせまいとしたところもあったそうだ。福井では翌日の授業は役人が来なくても差し支えはなかった。しかしその後のグリフィスは藩校の授業と見聞の旅と人的交流の生活を思いのままにエンジョイしていた。授業ではドイツ語とフランス語の選ばれた生徒の組を作り、旅では粟田部、三国港、山中温泉、白山登山といったところへの宿泊を楽しみ、訪ねて行って佐々木権六、三岡八郎、橋本綱常[4]らと語らう忙しくも有意義な日常を過ごしていた。ところが夏休みが終わって授業が始まると、これまでのような余裕がなくなりグリフィス自身にもどこか焦りのようなものが見え始める。9月8日の日記には、学生（生徒は今の小学生、学生は中学生以上）の福井脱出が続き、4～5日中に5人が辞めていく。粕谷、牧田、山村、野村が別れの挨拶にブドウと卵を持ってやってきた。みんな横浜へ行く。10月22日には奈良、中村、岡田が東京へ行く。

期待していた新築の外国人住宅が完成。入居したのは一般公開をした9月22日以後の月末になった。建て前が6月8日であった。12月3日付、家に出した手紙のグリフィスが書いたスケッチによると、もはや砲術士官の家は消え、足羽川から眺めて右端の英語教師ルセーの家は基礎工事のみで放棄されたまま、左側の家にはグリフィスがすでに住んでいて、その2軒のあいだの医者の家は完成したばかりのようだ。余談になるが砲術のブリンクリーは明治政府によって東京に引き留められた。幸いに福井に来る代わりに彼が著した『語学独案内』（1875）は有益だった。医者に望みをかけていたがこの時点での招聘は不可能とあって結局変幻極まりない日本国の事情に福井藩の打った手は時勢に遅れていたとグリフィスは思わざるを得なかった。ドイツ人医者については2～3ヶ月内にきっと来ると聞かされていた。来るか来ないか様子を見て建築を決めていた。

グリフィスは自宅の2部屋に一つは助手の本多、大岩、中野を、もう一つに生徒の笠原、本山、吐酔を泊めて親睦的な生活をおくっていた。日曜日の朝はみんなで新約聖書を読むことから始まった。グリフィスは藩との契約のなかで基督教の普及を禁じられていたが、ここでは禁止の目を盗むことができたのと、もう一つには廃藩の世が物騒になると自己防衛のために日本人をそばに置くことを考えてのことだったと思われる。何しろ護衛役人が解雇になった。キリスト教信仰については、母の温かく厳しいクリスチャン・ホームのもとで育てられ、長じて教会の奉仕活動に熱心であっただけに宣教というのでなくその信仰について語り教えたい気持がいつもあったと思う。

版籍奉還に続いて廃藩置県の大変革を起こす(revolutionary)動きに福井の知藩事でかつての大名松平茂昭は要務で東京と福井を行ったり来たりして多忙を極めていた。10月1日に藩士との別れの式があげられた。2日は福井を離れて東京に移る最後の日になると告げられたグリフィスは29日に大名と千本久信、村田氏寿、長崎、奈良元作を大晩餐に招待した。家族あての手紙にその豪華な洋食のメニューが書いてある。しかし残念にも藩主は急用で不参加になった。

2

大名と武士（サムライ）の永遠の別れの式が始まる。日記には「素晴らしい日―封建日本が文明国に移り変ろうとする」(Feudal Japan merging into the civilized empire)と書いて廃藩の意義をよくまとめていた。次に1871年10月1日（日曜日　朝）の家族みんなにあてた手紙から書き抜いてみよう。特に大名のかかえる廃藩の意義をグリフィスの立場から明らかにしたい。

昔から続いた各地の封建政府がすべて廃止される。そしてまもなく天皇の政府が最高位につくことになろう。前の藩主は引退して私生活に入り、収入はあるが権力は皆無になる。日本の新時代は日本の歴史の上で最も重大な時代になる運命となった。しかもこれは最初から藩主自身の提案によっていた。これからの日本は単一国家として生きる行動をする。そして格言のように団

結は力なりとの真理を実現していくだろう。

昔の城、いま学校になっている大広間に集まった武士階級、教師、兵士、医者、引退役人ら全員にとって藩主に会うのもこれが最後となる。この送別式はグリフィスの生涯でもっとも忘れることのできない出来事であった。大きな感動を覚えた。変化には悲しみが伴うというが「古い封建社会が消えていくのを見るとどうしてもしんみり悲しくなってくる」と手紙に書いていた。藩主は武芸所、養生所を訪ねるとグリフィスにも別れを告げに来て30分いて帰った。"The Mikado's Empire"では数分になっているがグリフィスの努力に感謝し、東京の家に遊びに来るよう勧めた。翌日、知藩事は千人を越えるサムライに護衛されて江戸へ発った。福井の人はほとんど晴れ着姿で彼を送りに集まった。老人、女、子供が泣いていた。グリフィスが遭遇した廃藩という出来事が彼の精神にどのような作用を及ぼしていくか。それをじっくり見て行きたい。告別式の模様は"The Mikado's Empire"のなかで臨場感あふれる筆致で描かれている。なお12月4日には次の移動、すなわち藩主の妻と生家の総勢50人の離脱が始まった。

大名が別れを告げた大広間は米国式科学校という新文明のセンターになるだろう。日本の秋は美しい。グリフィスの日記に「厳粛なまでに美しい秋の日」という言葉がページの隅に見え、「雪に輝く白山」、「美しい月夜」にまじってディケンズの『ピックウイック・ペーパーズ』を読んでわずかに心を慰めたと述べている文章を見つけた。これはグリフィスのちょっとした精神的症候だ。ちょうどこの頃Scientific American社に寄稿したグリフィスの通信文（11月26日）によると、

米国で日本人遊学生12～3名に化学を教えていた。そこへ越前の藩主から科学校設置のための招聘があった。行っても失望するだけと思ったが学生らに励まされて来てみると蘭語で医学、化学を学ぶ青年がいる。火薬、銃の製造工場があり、港に防波堤を築くなど幼稚な段階だが完成に向かって邁進している。町にたった2本の煙突は化学所と外国人の家から出ている。科学的農業、酪農、が福井産出の石炭、印刷機の設置など福井科学校は新文明発散のセンターになるだろう

小説で心を慰める。それほど気が沈みがちになった。遠出して宿泊するような旅はしなくなった。優秀な留学生日下部太郎の居たところなら是非共行ってみたいというのでなく日本から来た留学生たちに行ってほしいと頼まれたから来た。なんと消極的な変化の渦中にいる。はじめ廃藩の布告は静な変化にしか映らなかったが藩主と家来の別れのあとのなんと大きな変化。うわさよりも情報が気になる。実際にグリフィスの耳には聞かせたくない情報もあった。沈みがちな感情は町の人の間にも広がってきた。

11月は福井で味わうもっとも憂鬱な月になった。待てども来ない家からの手紙。その待つ身がつらい。日記が単調になり丸一日が日本の美しい紅葉の秋を愛でる言葉で占める単調な日記。こんな時、不愉快なことが明るみに出てきた。『グリフィスと福井』とい

うわたしの本でどうしても分からない人物がいてその名をオハタとしておいた。藩が雇った新しい通訳が5月22日に着く。グリフィスは化学の本作りを手伝う人がほしかった。たまたま勝海舟の依頼でグリフィスは藩校静岡学問所の理化の先生が親友のエドワード・ウオーレン・クラーク(Edward Warren Clark)[5]にきまった。オハタは勝安房の推薦を受けて学監村田氏寿により一年契約3000ドルの高給で採用された。名は太田源三郎という。横浜語学所の英学教授で遣欧使節の通詞をつとめたが横浜語学所の閉鎖とともに行き場を失った。太田は静岡県が教育指導者として派遣する御貸人の一人であった。こうまでして二種類の化学テクストのどちらかを岩淵に代わって誰か訳者を求めたところが案に相違して化学の英語用語を知らない太田の採用がこのような結果になった。廃藩で人間不信が気風の世の中ですこしでも生計の足しになるものに預かろうとしてのことであったらしい。グリフィスがモットーのノーブレス・オブリージ（高貴な身分に伴う義務または責任）に背くものといえよう。

廃藩による政治の変革は知藩事と呼ばれた旧藩主が東京に移住するようになって治まった。グリフィスにはこれほど変化に富む国はないように思われた。日本人は人の心の移ろいを四季の変化になぞらえることの好きな国民である。日本の自然の美がお気に入りのグリフィスにはこの狭い国にふれ合うことによって少しの不安なら「羊毛の肩掛けのような雲」「崇高な暗い山の姿」「天界が栄光の重さで脈うつ」といったような神学的描写を記すことで解消している。と同時に現実的なものとして「一人の女が数珠を持って月に祈るのを見た。」(Saw a woman praying to the moon, with beads &)といったことにグリフィスは心を動かされた。本多の家を尋ねたが留守だったので佐々木の家へ行く途中のことであった。佐々木とは役人に期待される変化と新しい役目について話した。

しかし4ヶ月過ぎて11月も末の27日の日記はこう訴える。

むなしい一日であった。福井人の間に心の動揺がおきた。昨日、東京から使者が着いて武芸学校を廃止せよとの命令を持って来た。そしてこれがただちに実行されたためであった。他にも徹底的な変更があるようで、その結果どうなるか、またそれがどんな性質のものかはわからないが、福井人の心に相当な不安を与えたことは明らかである。

ちょうどこの日グリフィスは家族へ手紙を出している。「日本は急速に変わっている」が日記には変化、変更と出ている。サムライの道場であった武芸学校は廃刀と同じく廃校を命じられたのだ。グリフィスによれば廃校の狙いは人々の生活を改善するために学校の費用を書籍など科学、農業に関する外国のものの購入に使う。福井に来てから少なくとも700人が脱出。優秀な若者を多数、特に数人のよい学生を失った。しかし失ったものは改善し凝縮することでその損失は償われた。城の木戸が取り除かれて移された。城壁がこわされ濠が埋められ、かつては水があったところに家が建てられた。むかしながらの日本

の家だがそれもやがて変わることだろうとグリフィスは思った。11月最後の日の日記を紹介しよう。「外は雨、心のなかも雨。家から手紙がこない。神戸から器具がつかない。無為に過ごした。『ピックウイック』を読んでわずかに心を慰めた。たそがれ時に散歩した。父・母・子供の家族が、鈴、仏典、ろうそくを備えた、燈明のついた仏前で祈っているのを見て感動した。」'Rainy day outside & inside, no letters from house & no arrival of apparatus from Kobe,wasted the day in doing, but solaced a good part of it, by reading Pickwick. Took a walk at twilight, and was deeply interested in seeing a family at prayers before a lighted shrine, bell, book, & candle,father, mother, children. Evening read Pickwick, ate delicious oranges, chemistry &'

月に祈る女、仏前で祈る家族、この感動は日本で最も忘れない出来事となった。廃藩がもたらす変化に対し不変の象徴である。言い換えると耐える姿である。

東京の開成学校教頭のフルベッキ⑥(Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830～1898)の世話で英国人ルセー(Alfred Lucy)はグリフィスの来る半年前から福井藩に雇われて英語を教えていた。ところが一年契約であったが更新はされないとフルベッキからいってきた。日記によるとグリフィスから2度、フルベッキから2度の手紙しか記録がない。しかし藩主の退位によって言い分を失った地方政府は明治政府の役人の意のままにされる傾向が出てきた。それは人の能力や活力を大都市に集中することから起こった現象である。日本の将来のことを思うと現在よりよくなるとグリフィスは考える。福井で自分の意見や主義を聞いて影響を受けた親しい日本人がこのまま地方の上役人にとどまらないで高官として明治政府に入ってほしかった。

3

それにしても住宅もそうであったが化学所(ラボラトリー)の完成は遠い。4月22日に土台作りをして、6月の初めには完成に近付いていると日記に書くほどであったのに9月にはいっても遅いのは不思議に思う。化学所の授業開始はついに12月1日になってしまった。住宅もラボも完成のおそいのは廃藩後の人心の混乱によることが大きかったと思いたい。学校では化学・物理を始め能力の進度に合わせてたびたびクラス替えをし、実験授業は受ける者に驚きを与えた。岩淵を中心のバーカーの化学書の翻訳(バーカー教授の新しい化学書を注文6／10、非の打ちどころのない珠玉の如き書物がとどく10／28)、生徒に持たせる日本人向きの化学の教科書作り、ドイツ化学の勉強(東京の学校で教えることを予想)。クラークの手紙(1874)によると、日本ではBarker's Chemistryが理論と実際に分かれていて満足、初心者向きのHofmann's Chemistry、実験にはBloxam's Chemistryがいい。グリフィスの使用するRoscoeは様式がきらいといった順に書いてこんな話が入っている。ラトガース・カレッジ理科卒の杉浦弘蔵⑦(本名　畠山義成)開成学校校長は日本に帰ったらグリフィスが執筆中の化学を日本語に訳すことを頼まれていた。

国の教育機関に関係している高官に手紙でグリフィスは日本の教育に最も必要なのは教師であると書いて師範学校を6ないし8校設置するよう提案した。また10月ごろ文部省に

も国の教育制度上選ばれた各地に工芸または科学学校数校の設置を促しておいた。それらが効を奏してか。1872年1月10日受理の三岡の手紙は最初の工芸学校(Polytechnic School)が東京に設置されるがそれの提案者のグリフィスに会って相談したく上京せよという。またフルベッキからは文部大臣の要請があり新しい工芸学校に教授の職があるので来るように急き立てる。この2つの手紙がグリフィスの東京行きを決定づけた。それにつけてもその後福井藩士として藩に忠誠な人物(三岡と村田)が真二つに分かれた立場で意見を言うことになる。グリフィスがこの矛盾の間に立たされた。

福井か東京か。福井の学校か東京の学校か。二者択一に迫られるグリフィス。県庁からは村田(知事代行)の現状維持、グリフィスの東京志向と各々意見を述べた手紙が文部省に送られていた。この2つの手紙の翌日、県庁で村田氏寿からグリフィスに福井にいてほしい。これは福井の人たちの願いであるとくりかえした。1872年1月17日、村田と1時間半の話、そして17日の村田から届いた手紙に応えてグリフィスの18日付けのいわば告白的といえる正直な長い英文の手紙が村田の手に直接届く。グリフィスの一世一代の手紙といえよう。それによると廃藩になる前から東京に移ることがあるかも知れないとフルベッキに話している。それをフルベッキから聞いて文部省の役人も知っている。となると廃藩はグリフィスにとって福井を離れる方便として有効な出来事になったと見られる。福井のすべてが変わったとき彼には福井はもういるところではないと見定め自分が日本に尽くし、日本の文明化の大事業を助ける仕事に従事したい。すべての福井人の親切であったこと、どんな時も学校や生徒のために彼の時間、技能を尽くすように努めてきたと書く。

翌年1月20日の手紙に村田との口論の模様が劇的に詳しく記録されて残っている。どこまでも3年契約にこだわっていないことが分かる。もちろん契約の初めからそうではない。廃藩のような大きな出来事の起ると知る由もなく気配を感じたのであってあくまで思いがけない挫折となった。その上、福井での目的より何段も高いところへの意欲は自ら望むことであった。フルベッキの指導を待つ身であった。契約した福井藩はもうない。俸給の支払いは9月から天皇の政府になっていた。化学所の継続か廃止かの権限をその政府が握っている。文部省から正式の招待が来たのは12月26日。県庁へはすでに11月にお呼びがあったという。村田の好戦的敵はグリフィスではなくてフルベッキである。

村田氏寿(1821～1899)大参事。学校掛として福井藩校にグリフィスありの声があがった。他藩にきこえたほどに厚くもてなした。一途な思いの役人でグリフィスの去就をめぐる論争にサムライ魂を見る思いがする。村田の強い意志を白山に譬えたのはグリフィスである。洗練された日本の役人に打ち勝つにはあらゆる腕前と忍耐、それに手際のよさを必要とする。細長い両刃の剣を使っての戦いにグリフィスは岩のごとく決然として立ち向かい一人発つことにした。なんといっても福井は変わった。独立の藩ではない。天皇の政府が彼を引き取る権利がある。フルベッキが良い審判員ぶりを発揮してこんどはグリフィスを東京にひっぱろうとする。村田

はとうとう匙を投げた。これには岩淵が一役買ったと言われたが知る由もない。

廃藩が誘発して起こした実例を外国人教師について考えてきたのだが、グリフィスが新しい制度をもちこみどちらかというと変化を建て前とした。ところが静岡で教える親友のクラークがとった立場は吉野作造によって発見されたクラークの建議とよばれて昭和2年に発表される。彼は静岡に着くと最初の安息日にバイブル・クラスをひらいた。グリフィスはおどろいた。基督教布教の活動をなによりも気遣っていたのだから。ところがまたしても建白書を書いて地方を顧みない中央集権の教育政策に反対した。

大ナル都府ハ学問ヲ勉ムルニ宜シキ所ニアラズ、其故ハ大都府ニハ心志ヲ蕩散スルモノ甚ダ多ク、誘惑ノ事甚ダ多クシテ書生ノ道路ヲ囲繞セリ、……

工芸学校を全国の8都市に、その最初を東京に設置してグリフィスを教授に迎える。じつはこれが彼の望んでいたことであった。しかし全く泥縄式の間に合わせ的であった。文部省指導の新学制が作成目前に迫っていた（明治5年12月26日）。グリフィスは急にスコットとディケンズが読みたい。それぞれ5～6冊を送れと姉のマギーに書いて出す心境が知りたい。Dickens, Charles（1812～1870）イギリスの小説家。登場人物の機知とユーモアに富む言行が読む者の心を捉える。Scott, Sir Walter（1771～1832）スコットランドの詩人・小説家。歴史を背景に社会を広く描き、多種多様な人物を躍動させる。廃藩の通達が日本人ばかりか外国人グリフィスの気持ちも悲しくさみしくしたのである。結局、廃藩をどのようなものと受け取ったか。日記では、手紙では、通信では、著書のなかでは、その他という具合にどうなっているか。当たって見るべきであろう。

4

昭和2年。日本史上画期的と言える1870年代前半。その1871年から56年後の1927年の日本にいるとしよう。その間の国の発展に寄与してきた経緯について触れるのは簡単にしておいて、彼のことをもっとも知るのはその多数の著書を読むに勝るものはない。それによって彼の知る日本の知性は次の5つのジャンルに分類される。父と日本歴史、母と牧師、妻と還暦、日本人と日米関係の著書、自分と文学。

いまグリフィスの年譜を作るとき、Part I. 最初は“The Mikado's Empire”[8]（1876）。国の発展に合わせて版を重ね、1912年 754ページ 12版で終結した。次は Part II. “The Lily among Thorns”（1889）これは妻キャサリンとの幸福な牧師時代。（Christian –home）。Part III. “The Japanese Nation in Evolution”（1907）日露戦[9]に勝利して日本の戦力を世界にアピールして得意な発展（Evolution）の時代。Part IV. “Millard Fillmore”（1915）伝記ものから第一次世界大戦後の世界の大国の仲間入りを目指す日本にとっても米国の排日移民法[10]をどう見るか動くかにたいしてフィルモア大統領の和解（Reconciliation）の精神の再認識。最後に Part V. は“Japanese Fairy Tales”のような Fairy Tales シリーズの一冊。寓話的読み物を次々と発表、75歳ごろ。生ま

れつきの柔軟なイメージを駆使して人間性(Humanity)のいろんな面を取り上げ理想の国を追求しようとした。このように彼の歩いた道は認識、発展、和解といった道のりが挫折を味わいつつ人生の歓びのなかを一本貫くのであった。

振り返れば廃藩による封建制度の崩壊はニュー・ジャパンに生まれ変わるために必要であった。と同時にサムライが学ぶべき唯一の生き方であった武士道が亡くなったことが強く惜しまれてくる。グリフィスの考えでは日本の知性のなかから同時代の知識人でともに武士道を捨てずに提唱したのが新渡戸稲造であり、実践したのが内村鑑三であった。福井にモラルはあった。神も仏もあった。祈る人もいた。しかし精神を律するものがなくなった。支えが無くなれば、戦争にかりたてられる恐れがある。日本再訪はかねてからの要望であった。福井に寄らねばならぬとグリフィスは思った。

その願いが叶う知らせが渋沢栄一、藤山雷太、井上準之助や教え子から届く。日米間の和解を願って83歳のグリフィスは婦人同伴の旅、講演の旅に出る。一日平均5～6回の講演。途中、朝鮮訪問、福井再訪、別府のホテルの休養を含む日本一周の講演旅行であった。1926年10月23日家を出発して帰ってきたのが1928年2月19日という強行軍であった。

列車が福井に到着。グリフィス夫妻の間に今立吐酔を挟んで自動車が福井駅を出る。吐酔は長く伸びた真っ白な口髭の老紳士で、通訳を買って出るほどグリフィスを師と仰いできた人であった。4月の好天に恵まれ日米両国の小旗をふって市内小学生、群衆が歓迎した。ここに美しい話が残っている。福井高等女学校を訪ねる夫妻に花吹雪が舞い散ったという。昭和2年に入学の卒業生Fさんが座談会でした話。「グリフィス博士の来日は春らんまんの日だった。全校生徒が桜の花びらを集めて博士を花吹雪で迎えた。後で先生から博士がとても喜ばれた報告があった。」というのであった。人は若者に期待する。福井市内の私立校、実業校の学生の集まりでグリフィスは「信仰により身体精神共に勇敢に、天皇に忠義を、政府に忠実を、徳義を重んじ、善良なる人民となり、国家のために尽くすこと」をあげた。

永井環福井市長から市の贈り物の羽織、袴、袷、夫人に錦紗縮緬の羽織と袷。これらは福井高等工業学校で織って染めたものであった。このときグリフィスの脳裏に浮んだこと。つまり廃藩になってうろたえたときグリフィスの教えた科学精神が羽二重産業や電気・化学工業の勃興に力があったことを知った。また1871年7月18日の廃藩の布告について「気遣はれたが血を見ずに完成した廃藩のこと」と恐怖をもって語られるのを新聞で読んだ。もしもそうなっていたらと身の毛もよだつ思いがしただろう。

福井中学校を訪問。校長室で水晶学者市川新松氏（1865～1941）から水晶標本の説明を受けた。自作の水晶製品である指輪、櫛、観音像、守り玉、物理学応用の水晶の玩具塔が贈られた。市川氏は今立郡北新庄村に住み、水晶標本7700、多数の英語論文をAmerican Journal of Scienceに寄稿した。グリフィスは帰国前に宿泊の帝国ホテルから直ちに手紙でお見事としか言いようのない宝石細

工術(lapidary)に感心していた。実際、グリフィスは貴金属職工になってもやっていける手先の仕事なら自信があると述べていた。

福井が誇るべき学者、英語学者斎藤静、水晶学者市川新松についてグリフィスとの関連においていま、話すことはできない。2人ともグリフィスからの手紙など保存していて斎藤先生がグリフィスの思い出を残した袋に筆書きしてある文章を紹介しよう。「昭和37年1月20日、この研究は、この方面に於ける最初のものなれば、永久に保存せよ」。わたしはまさに斎藤先生のこの研究をやってきたことに気がついたしだいだ。学問や人生上いろんな影響を与えてきたグリフィスの存在を知ることはわれわれの誇りでありそれを福井は忘れてはならないと思う。別れに'Love me little, love me long.'を残して1927年4月29日グリフィスは去って行った。再訪の折の歓迎に感謝した夫妻は福井市に日時計を贈ることにしたが、結局夫人によってその建設は1934年9月10日に竣工され、台座の御影に平和を願う向日葵の花が銘とともに刻まれている。この人の精神から何か学ぶことがあれば豊かな心を育てる支えになると思うのである。

最後に**注**(11)の英文を見てほしい。グリフィスの死の直後に出版されたアメリカ小説から引用した。廃藩は大名とサムライの自発的放棄によって起きた。しかも一滴の血も流さずに成就した世界史上叉と無い革命である。これが日本の外から見た評価である。この書にグリフィスが序文を書いていた。死の3～4週間前のことであった。

グリフィスが福井で経験したことであるが、日本人が廃藩で実証ずみのパワーこそ国際精神(International Mind)と呼ばれるにふさわしい。この精神を形成するのは国家遺産と称すべき武士道の心であるように思われた。それはとりもなおさず日本が大国に追従して物欲主義に陥り、泥沼と化した世界戦争に飛び込む危惧のあることを暗示していたように理解されよう。ここまでがグリフィス翁の辿った必至の見解であった。

注

(1) 砲術のブリンクリーは明治政府によって東京に引き止められた。幸い福井に来ない代わりに英学者にとって有益な『語学独案内』(1875)を著した。(1841～1912)

(2) Margaretの愛称。グリフィスの長姉。一生独身(1838～1913)

(3) 英語教科書　①Primer　1872
②Pictorial Primer　1872
③Spelling Book　1872
④First Reader　1873

(4) この三人とは日頃よく接した。佐々木権六(1830～1916)　1867年、藩命により渡米、武器類の買い付けをした。明新館で図画を教える。1871年工部省出仕。息子忠次郎(1857～1938)。グリフィスの学生で開成学校に入りモースに学ぶ。三岡八郎(由利公正1829～1909)。藩財政の整理再建にあたった。太政官札の発行や五カ条の五誓文作成などの功により明治3年永世禄八百石を下賜される。橋本綱維(1841～1878)藩命により長崎で蘭語を学ぶ。福井藩医。陸軍省からプロシア留学。日本赤十字病院長。

(5) Edward Warren Clark(1849～1907)

ポーツマス生まれ。ラトガース・カレッジ卒業。ジュネーブのカルヴィン派の神学校に2年留学。1871～73年静岡、1873～75年開成学校で化学と物理を教えた。グイフィス評「楽しい旅の道連れ。おもしろい人。熱心で辛抱強い。企画に富む。眼病からくる恐ろしい神経の過労のためか移り気なところがあった」。

(6) 来日宣教師。1859年長崎に上陸。教育家。1869年明治政府に招かれ開成学校の経営にあたり71～74年同校教頭。グリフィスの福井藩や大学南校との契約の周旋をした。

(7) 1867年ラトガース・カレッジ理科入学。1873年帰国、開成学校長になったが、過労のたえに肺結核を患い、フィラデルフィア万博の帰途死亡。グリフィスは自著の化学書の翻訳を杉浦に依頼していたといわれている。

(8) 福井藩においてグリフィスは廃藩による変革を経験する。米国人に未知の国日本の歴史を知らせたい。それには既成のものに自分の見聞を重ねて歴史物語的紀行のかたちをとるがいいと彼は考えた。学生時代によく読んだ歴史家モットレー、プレスコット、レッキー、テーラーなどの影響も大きい。天皇制を日本国民の目の高さで見ると、日米間に異質ものがよこたわるのが見える。そこに和解の精神が生まれる。

(9) 福井のサムライを知ったことはグリフィスに幸いであった。サムライの心とは利益のための戦争を恐れる。金儲けのため国民の精神と活力を征服と大虐殺の道に向けるのは承知しない。日露の戦いで日本の勝利のよってきたるものは武士道と西洋の個人主義の一体化にあるとグリフィスは思った。彼のいうChristian Bushidoである。

(10) 日本に対する国外の黄禍論、米国に於ける日本人移民の排斥などの国際間の摩擦が起きる。一方、国内では日本人の対外意識の高まりがナショナリズムの台頭と孤立主義に導く。

(11) '……the intricate feudal system was abolished by the voluntary renunciation on the part of daimyos, of special privileges and rights. Such a renunciation—a veri-table revolution, yet accomplished without the shedding of a drop of blood—has virtually never been paralleled I world history.'

"The Way of Ume"(1928)

By Edith A. Sawyer

New York: William Edwin Rudge